

# 初職非正規雇用が若年者キャリアに与える影響

—Japanese Life Course Panel Survey (JLPS) の分析 (3) —

東北大学／日本学術振興会

石田賢示

## 1 目的

本研究では、1980年代後半より拡大傾向にある非正規雇用と呼ばれる働き方が、学卒後の若年者キャリアにどのような影響を与えているのかを、JLPSの職歴データの分析を通じて明らかにする。1980年代後半より非正規雇用と呼ばれる雇用形態が日本の労働市場で拡大し、学卒後初職を非正規雇用として開始し、その後非正規雇用の継続を余儀なくされるという不安定雇用層の存在が近年の社会調査データの分析からも指摘されている。

しかし、初職が非正規雇用であることが、その後正規雇用への移動可能性の変化にどのように影響するのかについては、十分な検討がなされているとはいえない。その際には労働市場に入ってから時間を考慮した分析が必要となるが、データの制約もあり実証研究の数は少ない（数少ない例として中澤（2011）など）。以上の問題関心と研究目的にもとづき、JLPSの職歴データを分析する。

## 2 方法

分析にはJLPSの職歴データを用いる。従属変数は、初職入職後の各時点で回答者が正規雇用か否かである（基準は非正規・無職）。キーとなる独立変数は、初職入職時に非正規雇用か否か、そして学校卒業後からの時間（半年単位）、およびこれらの交互作用項である。分析はランダム切片ロジットモデルによる成長曲線モデルを用いた。なお、推定は男女を分けて行なっている。

## 3 結果

分析の結果明らかになった主要な知見は以下の通りである。正規雇用就業に対する初職非正規雇用と学卒後時間の交互作用項の効果は、男性では統計的に有意ではなく、女性に関しては有意に負であった。初職非正規雇用の効果は男女ともに負であった。以上の結果は、対象者の初職の職業や学歴、婚姻状況の影響をコントロールした上でも確認された。

## 4 結論

以上の分析結果は、男性については初職段階での雇用形態の差異の影響が、学校卒業後の時間が経過しても小さくなることはなく、持続するということを意味する。女性については雇用形態の差異がその後の正規雇用への移動可能性の変化にも影響することを意味する。今回の分析からは、近年の若年非正規雇用はキャリアの袋小路（McGinnity et.al 2005）につながる可能性が示されたといえる。ただし、知見の頑健性を高めるにはさらなる検討が必要である。また、今回の分析で得られた結果が現在の若年者キャリアの特徴といえるかについては、他の調査データから得られる知見を総合しつつ判断する必要があるだろう。

## 謝辞

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（S）（18103003, 22223005）の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。また、本研究は平成25年～26年度日本学術振興会特別研究員採択課題（課題番号7362）に係る研究の一環である。